

読売

# 教育ネットワーク

社会はまるごと学校——  
すべての大人が先生です



富士見丘中高(東京都渋谷区)で特別授業を行う長崎大学熱帯医学研究所の戸田みつるさん(右)。生徒たちはケニアから一時帰国した研究者を質問攻めにした(2・3面へ)

**巻頭特集** 長崎大学熱帯医学研究所 戸田みつるさんが富士見丘中高で特別授業

「感染症から命守りたい」ケニアでの挑戦語る 2・3

全国高等学校ビブリオバトル2016 4・5

国学院大学で「新聞のちから」プロジェクト 6

茨城県で高校生に学校新聞づくりを指導 7

お知らせ・info 7 ことばと体験のキッズフェスタ／「中学受験サポート」セミナー 8

リレーエッセー 米デポー大学「教授陣に恵まれた中西部の『パーティー・スクール』」 9

2017.2

Vol.26



写真は3枚とも戸田さん提供

2016年、ケニア・ナイロビで開催された感染症早期警戒システムの研修会。地域の担当者は携帯電話を手に操作を学んだ

(上) 2004年12月、ケニア・ナイロビ郊外で暮らすマサイ族の一家を訪ね、記念撮影に納まる。前列右端が戸田さん

(下) 2013年に再訪し、成長した子供と対面

**感染症 早期警戒システム**  
各地の医療従事者がSMSで発信する「疑われる病名」「患者年齢」「性別」「生死」などの情報がサーバーに収集され、その発生地域や分析結果などが即時に保健省や自治体担当者に届くシステム。感染症や災害など40種類の危機に対応する。

**生徒たちの声**

戸田さんの話を生徒たちは様々な思いで受け止めた。

**水野萌子さん (17)**

戸田さんはカッコいい女性だった。仕事に誇りを持ち、実践に裏付けられた言葉には重みがあった。昨秋に英国の学校から戻って、進路について悩んでいたの、目の前のことを徹底的に追究することが未来につながる」というメッセージに救われた気がする。得意な英語に磨きをかけ、自分の視野を広げたい。

**今枝梨風さん (16)**

文化の違いを乗り越え、人々を病気から守ろうとする戸田さんの生き方がうらやましく、あこがれた。未来の自分を支える知恵が一つ一つの授業に隠れていると思えたので、学校の勉強を大切にしたい。

**佐藤水芳さん (13)**

過酷な暮らしをしているのに満面の笑みを浮かべられるマサイの子供たちに興味を持った。その理由を考えると、「人は生きていられるだけで幸せなのではないか」ということに気づいた。今、身近なところから毎日、幸せを探している。ささやかだけれど、大切なことだと改めて思った。



生徒からは戸田さんへの質問が相次いだ

のSMSを活用すれば、診療所から国に情報を伝えられると思つた」のが開発のきっかけ。各地の医療従事者が患者の情報を発信すると、疫学解析が即時に保健省や自治体に届くシステムを長崎大やJICA、地元の大學生らと13年に完成させた。試験運用と普及のため、冠水した平原に難儀しながら村々を駆け回り、システムの改良を重ねた。その記録をスライドで見せながら、「既に1000人がシステム運用法を学び、約7500の医療施設が活用できるよう研修を始めたところで」。

戸田さんは、ケニア全域にシステムを広げる計画が着々と進んでいることを熱く生徒たちに語った。

**質疑応答**

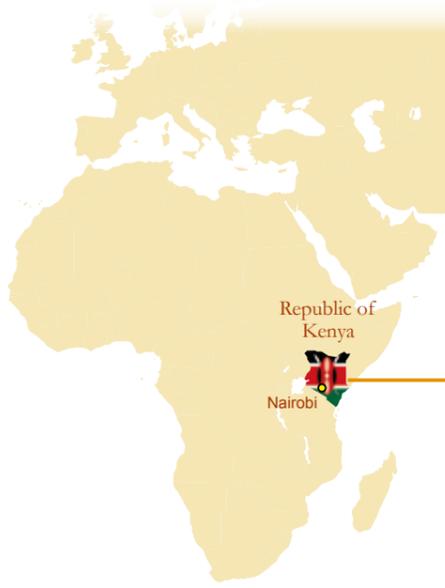
**Q** 授業の後半は質疑応答の時間。40分にわたり戸田さんと生徒たちは話し合った。

**Q** つらくて、やめたくなつたことは。

**A** 知人がテロの犠牲になったときはショックを受けた。でも、「自分が選んだ道。最後まで頑張るしかない」と自分を鼓舞して、ここまでやってきた。ケニア保健省の担当者を受け入れてもらうのも大変でした。全員、私より年輩で男性でしたから。

**Q** 日常生活で困ったことは。

**A** 停電がひんばんに起こりません。コンビニや風呂もありません。でも、「なくてもいい」と思えるようになった。オシヤレも、お金を使って買いたい物もなくはない。断水以外困ったことはないです。最後に戸田さんは生徒たちにメッセージを伝えた。「皆さんには興味あることをとことん勉強してほしい。それが、将来的に苦しんでいる人々を助け、世の中を良くすることにつながると思います」



# 感染症から命守りたい ケニアでの挑戦語る

長崎大熱帯医学研究所 戸田みつるさん 富士見丘中高で特別授業

コレラや黄熱病で多くの人が苦しんでいるアフリカのケニアで、携帯電話のショートメッセージサービス(SMS)を利用した感染症早期警戒システムを開発、その普及に奔走している日本人女性がいる。長崎大学熱帯医学研究所の研究員で国際協力機構(JICA)専門家の戸田みつるさん(33)だ。一時帰国中の1月23日、富士見丘中学高校(東京都渋谷区)で生徒320人を前に特別授業を行った。



**戸田さんプロフィール**  
2002年、横浜女学院中高(横浜市)から米マンハッタンビル大学に進学、国際関係学を専攻。04年のケニア短期留学をきっかけに、米ハーバード大で公衆衛生を学ぶ。10年にケニアで活動を開始。12年から長崎大熱帯医学研究所に所属、JICAの感染症早期警戒システム開発に携わる。17年7月から米疾病対策センターに拠点を移し、感染症発生地に駆けつけて調査を行う「病気の探偵」を目指す。

トイレのないスラム街の写真を説明する戸田さん。貧困と劣悪な衛生環境に目を向けるきっかけとなった。

その説明のため戸田さんが紹介したのは、100万人が住むとも言われるナイロビのスラム街、キベラの写真だ。赤道直下の強い日差しが、スラム前の荒れ地に散乱するビニールに降り注いでいる。何を写したのかを戸田さんに聞かれても、正解者はいない。「これは排せつ物を入れたビニール袋。トイレがないので家の外に投げ捨てるのです。スラムのあちこちで見られます。衝撃的な種明かしに「ええーっ、信じられない」と体育館がざわついた。

ばい菌と隣り合わせの生活が様々な感染症の流行を招くこと。ケニアには流行を把握するシステムがなく、有効な対策を取れないこと。そんな現実を示しながら、「公衆衛生は、国や社会全体の健康を守る方法を追究する学問」「感染症から人々を守る仕事です」と説明した。

**◆マサイ族の家が原点**  
「2004年、初めてケニアを訪れたときのホームステイ先です」  
授業の冒頭、戸田さんがスクリーンに映した1枚の写真に、会場の体育館を埋めた生徒たちは一瞬息を飲んだ。納屋かと思いがう平屋の家が赤土の上に立っている。壁を牛の糞で固めたトタン屋根のマサイ族の家。戸田さんの原点だ。  
「家にはトイレも水道もない。女の子は3時間かけて水くみ、男の子はヤギや牛の放牧の仕事がある。学校には通えません」。当時、米国の大学で国際関係

学を専攻していた戸田さんは、授業のフィールドワーク先としてケニアを選択。首都ナイロビから車で3、4時間かかる集落で過ごした日々を語り始めた。出産に立ち会った体験にも触れ、「胎盤が出てこない危険な状況なのに医者も助産師もいない」。生まれた赤ちゃんは泣かないし、助けを求めたくても誰もいない。人々の健康を守らなれ、「このとき、公衆衛生を学ぼう」と決意しました」と語った。

**◆感染症発生情報の伝達システムを開発**  
では、感染症発生情報を速やかに収集・解析するには、どうしたらいいのか――。2012年、戸田さんが目をつけたのはケニアで急速に普及する携帯電話だった。「国民の8割以上が持つ携帯

**◆公衆衛生を学ぼうと決意**  
「公衆衛生?」。聞きなれない言葉に首をかしげる生徒たち。

**◆日常生活で困ったことは。**  
停電がひんばんに起こりません。コンビニや風呂もありません。でも、「なくてもいい」と思えるようになった。オシヤレも、お金を使って買いたい物もなくはない。断水以外困ったことはないです。最後に戸田さんは生徒たちにメッセージを伝えた。「皆さんには興味あることをとことん勉強してほしい。それが、将来的に苦しんでいる人々を助け、世の中を良くすることにつながると思います」





英語での投書作成の指導をする佐藤伸・企画委員(奥)

「新聞のちから」プロジェクトの一環として、東京都渋谷区の国学院大学で、昨年12月から「新聞記者と学ぶニュース英語」の講座が開かれている。講師は、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の佐藤伸・企画委員。大学の正規の授業ではなく単位が取得できないにもかかわらず、学生たちは毎週熱心にジャパン・ニュースを広げながら時事英語の勉強に取り組んでいる。なお、昨年11月から12月にかけては、「マスコミ就職講座」も行われた。

## 国学院大学で

# 「新聞のちから」プロジェクト

新聞のちから

### ジャパン・ニュース使い 時事英語学ぶ

「新聞記者と学ぶニュース英語」の講座は昨年12月7日から3月29日までの計15回。大学よりみサポの仕組みを活用し、受講する大学生は4か月間、無料でジャパン・ニュースを購読している。登録している学生は22人。授業のねらいは、語学力のアップ

というより、何のために英語を学ぶのかに気づかせ、社会人として真に必要な英語力を身に付けることにある。

前半は、ジャパン・ニュースをもとに、社説を読んだり、記事のサマリー(要約)をつくったり、新聞を読めるようになることに重点を置いてきた。また、毎週の課題として、1週間ごとに自分が最も関心を持った「今週のイチオシ」の記事を切り抜き、それに対する疑問やコメントを英語で書く「質問づくりシート」読んで考えよう」なども実践している。

### 英語で投書に挑戦 テーマは「お薦めの映画」

7回目となる2月8日の授業では、ジャパン・ニュースの投書コーナー「リーダーズ・フォーラム」に実際に投書するための文章作成に取り組んだ。投書のテーマは「お薦めの映画」。学生たちが選んだ映画は「ハリ・ポッターシリーズ」や「ズートピア」「永遠のゼロ」など

様々。それぞれ、スマホの映画サイトなどで正確な事実を確認しつつ、自分の考えを四苦八苦しながら書いていた。

30分の制限時間で書き上げた文章を学生たちが朗読すると、佐藤企画委員は「あらずじけでなく、どんな予想外な展開だったのかも書くともっとよくな

### ◆マスコミ希望学生に「新聞の読み方」指導

「マスコミ(新聞・テレビ)就職講座」では、同教育ネットワーク事務局の吉山隆晴次長がマスコミを目指す学生に対し、具体的なアドバイスを行った。

講座は昨年11月30日から毎週4回にわたって開講され、参加学生たちは読売新聞を購読し、毎回の講義に臨んだ。

講義では、政治、経済、社会の動きに関心を払い、志望する企業や職種について、実際にそこで働いている人に会うなど足を使って情報収集することの大切さを強調。その上で、必要なニュースを効率的にチェックす

る。「映画の教訓があるなら入れてみたら」など構成や細かい文章表現についても丁寧に指導。学生たちは納得した表情でうなずいていた。

最後に、当日のジャパン・ニュースを開いて、学生たちが興味を持った記事についてリーディング。この日は、格安スマホに対する当局の規制についての記事を取り上げ、時事用語や新聞でよく使われる英語表現などについて学んだ。

今後は、ジャパン・ニュースの記者への英語インタビューなどを行う予定だ。

するための「新聞の読み方」や、エントリーシートを書く際の注意点、分かりやすい文章の書き方などを指導した。また、論文の添削指導も行った。

最終日には、読売新聞東京本社の会議室を会場に、本番さながらの模擬面接会を開催。参加した学生は、学生時代に力を入れたことや将来取り組みたい仕事についてなど、緊張した面持ちで自らをアピールしていた。

参加者の1人は、「これから具体的に何をやっていけばいいのか、自分なりに明確にできた」と話していた。

## 茨城県で高校生に新聞づくりを指南

茨城県高校新聞研修会（県高校文化連盟新聞部会主催）が2月24日、同県下妻市の市ふるさと博物館の講座室で行われ、読売新聞東京本社教育ネットワーク事務局の片岡正人専門委員が、高校生たちに学校新聞づくりのコツなどを指南した。参加したのは、岩瀬日大、古河中等教育学校、つくば秀英の新聞部や文芸部、生徒会の高校生24人。生徒たちは熱心にメモを取りながら、講師の話に耳を傾けていた。

### 岩瀬日大、古河中等、つくば秀英の3校が参加

3校は新年度の全国高校総合文化祭に県代表として出場することが決まっており、研修会は能力の向上を目的に行われた。

研修会はまず、3校の生徒たちが作成した「交流新聞」の講評から始まった。3校は高文祭出場決定をきっかけに、合同での新聞づくりを実施。2月19日に計23人が、医療や介護用のロボットを生産するベンチャー企業「サイバーデザイン」と、肉類加工会社「学園手造りハムの会」（いずれも、つくば市）を取材、4班に分かれて、それぞれその日のうちに書きの交流新聞を制作していた。

片岡専門委員は、「見出しが的確で、なにか書かれている記事なのかよく分かる」「具体的な数字を示して説明してあり、

とてもイメージしやすい」など、一つ一つの新聞について評価すべき点を指摘。「ロボットの写真をもう少し大きくすると、さらによくなる」「編集後記には

### 新聞記事使い、見出し付けを練習

続いて、学校新聞の役割や取材の仕方、記事の書き方、見出しの付け方、上手なレイアウトの仕方などを解説。記事や見出しについては、悪い例と良い例を挙げ、生徒たちに「どんな点がよくないと思うか」を聞きな

インシヤルでもいいから、署名があるといい」などとアドバイスをした。

がら、分かりやすい新聞の作り方を指導した。

この後、読売新聞茨城版の記事を用いて、生徒たちに見出しを付けてもらうワークを実施。10分で5本の記事にチャレンジし、各班の代表が自分の付けた見出しをホワイトボードに書いて発表。ほとんどのが的確な見出しを付けており、講師を驚かせていた。

講義を受けた生徒たちからは、「自分がおもしろいと思ったことを新聞に書きたいけど、それを載せていいのか判断できない」「記事は重要なことから

先に書くと言っているのは分かるが、何が重要なのか決められない」「記事の優先順位を付けるにはどうしたらいいのか」など質問が出て、片岡専門委員は丁寧に答えていた。



上手な見出しの付け方について説明する片岡専門委員



見出し付けの練習に取り組む高校生たち

## 首都圏最大級の中高進学相談会 「よみうりGENKIフェスタ」 3月26日 東京国際フォーラムで

読売新聞東京本社は、首都圏約200の中学・高校が集まる進学相談会「よみうりGENKIフェスタ2017」を3月26日に開催します。参加校による個別相談ブースに加え、学校選びや中高受験に役立つ講演会、セミナーも多数開かれます。入場無料。入退場は自由です。

特別対談は、将棋棋士の羽生善治三冠、SAPIX YOZEMI GROUP共同代表の高宮敏郎さんによる「学びに通じる将棋の世界」。特別講演は開成中学・高等学校校長の柳沢幸雄さんによる「子育てのヒントは、自分の子ども時代に」を予定しています。また、読売新聞教育ネットワーク事務局による「新聞で読解力を伸ばす!〜時事問題に挑戦〜」も実施されます。

上記対談と講演ほか一部のセミナーは事前登録制で、応募者多数の場合は抽選となります。詳細および申し込みは、公式サイトまたは事務局まで。

【日時】3月26日(日) 10:00~16:00(入場は15:30分まで)

【場所】東京国際フォーラム ホールE およびガラス棟7階会議室(東京都千代田区丸の内3-5-1)

【公式サイト】<http://genki2017.jp>

【問い合わせ】よみうりGENKIフェスタ事務局

☎03-3360-6008 平日10:00~18:00



# 読売「中学受験サポート」がセミナー

## 学校広報めぐり意見交換

読売新聞が運営する受験情報サイト「中学受験サポート」のセミナーが2月21日、東京・大手町の読売新聞東京本社で行われた。中学受験サポートの会員校に、これから会員になる学校を加え、私立中学35校の教職員計56人が参加。学校広報のあり方などをめぐって、意見交換した。

第一部は、前丁R東日本広報部長で日本ホテル常務取締役の薬師晃さんが「積極的広報と危機管理」と題して講演。組織が



広報の役割や危機管理の重要性を語る薬師さん

危機に陥った事件事故を引き合いに出しながら、どのような対応が広報を担当する者として大切なのかを解説した。また、日頃の広報の活動として、マスクミとの連絡網の構築と広報誌の作成を挙げ、家族にも読まれ自分の所属する組織にファンクラブが出来るような広報誌を作ることが大切だと強調した。

第二部では、読売KODOMO新聞の小林篤子編集長が教科書と身の回りで起きていることの橋渡し役となるよう、

クイズを出しながら編集に工夫を凝らしていると紙面を紹介。読売中高生新聞の村井正美編集長も、政治、経済、社会ニュースの背景と今後どうなるのかを若い人向けにわかりやすく紙面にしていると、編集方針を説明していた。

セミナー終了後は、参加者と読売新聞教育部の担当者、教育ネットワーク事務局員らと、学校の現状や広報について意見を交換した。



※詳細は<http://www.yomiuri.co.jp/kodomo/jyukuken/information/C0007789/20170222-0YT8T50103.html>をご覧ください。

## ことばと体験のキッズフェスタに900人

言語活動推進フォーラム「ことばと体験のキッズフェスタ」(主催：国立青少年教育振興機構、文字・活字文化推進機構、共催：読売新聞社など)が1月28日、東京都千代田区のイノホール&カンファレンスセンターで開かれた。子どもたちが活字に親しむことによって、想像力と表現力を育んでもらうのが目的で、約900人の親子連れでにぎわった。



テーブルいっぱいに新聞を広げてスクラップ新聞づくりに取り組む親子ら

メインホールでは、「かいけつゾロリ」シリーズで知られる児童文学作家の原ゆたかさんと、アニメの「かいけつゾロリ」でゾロリ役を演じる声優の山寺宏一さんによる講演会が行われた。原さんは、作品のイラストに自分が隠れている巻があることを、プロジェクターを使いながら説明。「『すると』『そして』『しかし』などをページの最後に配置して、次のページをめく

親子で会話をしながら、興味を持った記事や写真を切り貼りし、最後にタイトルと感想を書き込めば、世界に一つだけのオリジナル新聞の完成。参加者は、小学校低学年が中心だったが、一番人気が集まったのはトランプ米大統領の記事だった。中には反トランプのデモ行進などの記事を集め、「不人気な大統領」と見出しをつけた小2の女子児童もいた。

ってもらおうように工夫をしている」と創作の舞台裏を明かした。現在60巻に達しているシリーズについて、「ゾロリを結婚させて終わりにしたい」と展望も話した。

### 親子でスクラップ新聞づくりを楽しむ

サブホールには、とびだす絵本作りや絵本専門士による読み語りなど、様々なブースが設けられた。読売新聞の「親子で新聞を楽しむ」のブースには、参加希望者が長い列を作り、約40組の親子がスクラップ新聞づくりに取り組んだ。

海外で学ぶ・リレーエッセー 26

# 米デポー大学「教授陣に恵まれた

## 中西部の『パーティ・スクール』

渋谷教育学園渋谷高校(東京都 卒) デポー大学2年(執筆時)

勝原 達也 さん



大学選びの過程で、私は音楽と、社会学に関連した科目をもっと学べる環境を探していた。そして、デポー大学について初めて聞いた時、「ここだ!」と思った。

デポー大学は、米インディアナ州の小さな学園都市グリーンキャッスルにあるリベラルアーツ大学だ。大学は最寄りの空港から、アメリカの典型的な景色である広大なトウモロコシ畑を抜け、1時間程度、車で走った場所にある。ここでは、グリーンキャッスルの住民がデポー大学の学食に食事をしにくるし、学生たちは地域のために様々なボランティア活動や仕事を行う。学園都市ならではの温かい空気が町全体を覆っている。

地方の小都市にありながら、デポーは米国でも有数のパーティ・スクール(勉強よりも遊びが優先の学校)として知られている。一般誌に掲載された全米のパーティ・スクールの番付で、デポー大学は3年連続で



### デポー大学

1837年創立。学生数は約2300人で、その出身地は世界各地に広がる。リベラルアーツが学べると同時に、米国でも最も古い音楽大学の一つ。

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイト(<http://ryu-fellow.org>)へ。

上位15位以内に出された。学生たちは、よく冗談めかしてその評判を口にする。不本意な格付けではあるが、私はデポーが好きだ。デポーは、自分の興味のあることに最も熱中できる場所である。(世界でも有数の音楽大学である)ジュリアードの学生のように音楽を勉強し、他のリベラルアーツ大学の学生と同様の勉強ができるのは、デポーを除くと、それほど多くはない。

ベッカ・アプトン准教授の授業を取った。当時、私はそもそも人類学が何かさえ知らなかった。しかし、彼女の教え方や、紹介してくれた人類学系の書物を読むにつれ、次第に人類学という学問に魅了されていった。私は人類学を専攻することに決めた。

1年後の現在も、自分の選択に確固たる自信を持っている。デポーでなら、これからも素晴らしい教授とともに人類学の勉強が続けられると思う。(会報編集部抄訳 The Japan News 2016年8月14日)



大学寮で音楽科の学生たちに囲まれる勝原さん(中央) =本人提供